さらしなの里

友の会だより

第１７号　　２００７・秋

佐良志奈神社の新嘗祭にも通じる縄文まつり

さらしなの里縄文まつりは本年十五回を迎え、この里にしっかり根づいたまつりになった。復元住居から紫煙が立ち昇ると準備万端。一年の恵みに感謝し数多くのお供えと聖なる火を神に捧げ、「この実りが永久に」と祈る豊穣儀礼が、長老の先導でうやうやしく行われる。その年の収穫を神々に感謝するために各地の有力神社で毎秋行われている新嘗祭（にいなめさい）の原点でもあります。

この里で行われている新嘗祭といえば佐良志奈（さらしな）神社。かつては三日間にわたるまつりであったと記録されているが、現在は十一月二十二日の夜の祭事と二十三日の昼の祭事が行われている。私の父も祭事を勤めたことがあった。

佐良志奈神社の氏子総代は若宮、芝原両区それぞれ二名ずつ計四名が宮司のもと定例祭を執行しているが、新嘗祭は四年任期の最終年、主務総代が宮司より新嘗祭の番頭を託される。証に御幣（ごへい）を授かり、これを家の床の間に奉安し、準備をしていくことになる。私の家では六十人近い招待者、お手伝い、また公民館での両区協議員の接待で気ぜわしかったことを記憶している。

まつり当日は夕刻、大勢の来賓が見守る中、番頭、副頭は浄衣を着て、床の間には佐良志奈神社の掛け軸、御幣を前にして宅神祭（たくしんさい）が宮司により行われ、お払いで身を清めたところで、祝宴と続く。

秋の日がとっぷりと暮れるころ、両区の区長、協議員（区長は裃（かみしも）、ほかは紋付袴（もんつきはかま））のみなさんが弓張り提灯を灯し、自宅においでいただくと出立。行列は両区の高張り提灯、区長に続き、番頭、副頭、宮司、総代は槍を模した棒を手にしている。さらに若者二名にかつがれた太鼓、そして神に奉ずる御献穀を入れた唐櫃（からびつ）、協議員、祭典係り、神楽、最後に親戚、家族。総勢五十名を超える行列がドーンドーンと太鼓を打ちならし進んでいく。

沿道の家々では豆殻（まめがら）をパチパチと燃やし、お祝いを言いながら見送ってくれる姿に感激する。佐良志奈神社の鳥居を入ると、本殿までの杉並木。この中を進む行列はなんとも神秘的。さらに奥へ進み、末社を回り、拝殿で祭典の後、番頭、副頭は本殿へと進み、神に感謝をこめて拝礼し、神楽を奉納して夜の祭事は終了となる。

現在は公民館を活用して番頭宅での宅神祭を簡素化したものの、原点を崩さず、両区氏子の熱い心で新嘗祭を続けている。自然と神々との一体感を抱く縄文まつりと佐良志奈神社の新嘗祭。地球温暖化など問題にしなくともいいと錯覚する二つのまつりです。

（さらしなの里友の会会長・豊城 巖）

さらしなの里と縄文の全容が本に

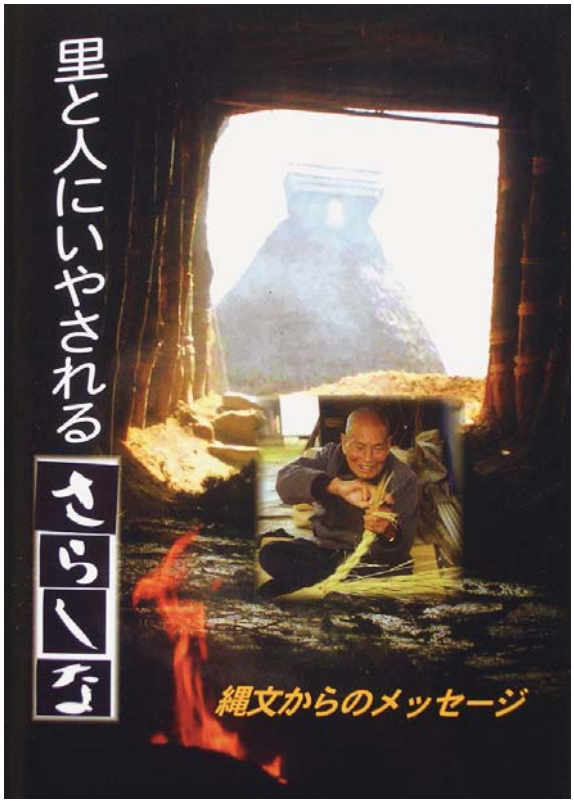
縄文まつり第15回記念出版

さらしなの里縄文まつり第15回を記念する本が完成しました。タイトルは「里と人にいやされるさらしな―縄文からのメッセージ」。地元の更級小学校が昨年の第14回から、まつりを登校日として全校参加することになったため、さらしなの里友の会では、さらしなの里と縄文遺跡について特集する本を刊行することにしました。

本誌の編集委員会メンバーにさらしなの里友の会の豊城巌会長と更級小の先生方にも加わってもらい、拡大編集委員会を昨年夏、結成。八回の会議を開き、編集・制作に取り組みました。

本は、さらしなの里が日本人の伝統的な美意識が凝縮されたところであることを解説し、そこで発掘された縄文遺跡の全容を時代順に説明。どうして縄文まつりが当地に定着したのかについても考察を加えています。

また、縄文まつりが始まる大きなきっかけになったのが「火」であり、発足当初のころ年配者を中心にいかにみなさんが夢中になったのかも生き生きと記されています。縄文まつりの体験コーナーにはどんなものがあり、小学生がどんな役割を担ってくれているのかも紹介しています。土器を使った縄文時代の太鼓「縄文鼓」や、アフリカの伝統打楽器、ジャンベのコンサートなど、さらしなの里のビッグイベントについてのエッセーも含まれています。



このほか、巻頭にはイラスト入りの楽しいさらしなの里マップも。巻末には年表もついています。カラー写真も盛りだくさんです。

本の製作費は、売上金で捻出することにしています。遠方のお知り合い、ご親戚へのプレゼントとしてお買い求めくださるとうれしく存じます。さらしなの里歴史資料館などで販売しています。一冊一〇〇〇円です。

全校参加2回目の縄文まつりに向けて

昨年より縄文まつりに全校児童が参加するようになり、今年は二回目をむかえる。昨年は縄文まつりを知らない職員も多く、初めての全校参加であることから、どのように全校が参加したらよいか模索しながらの取り組みであった。しかし、多くの子どもたちが縄文まつりで達成感を得るとともに、地域の方々と楽しい時間を共有できたように思う。

昨年の反省を思い起こしてみると、子どもたちがより自主的に動けるようにする指導、縄文まつりにかける授業時間数、係長さんと児童の仕事の綿密な打ち合わせ、豊穣儀礼までの待ち時間、出店でお金を使えなかったことなどが挙げられた。

さて、二年目の縄文まつりはどうだろう。縄文服も二つの学年が作るだけでよいし、まつりの雰囲気や流れも分かってきた。昨年の子どもたちの動きや反応（特に各コーナーでの仕事ぶり）を生かしたり、効率のよい準備をし、職員一同、二年目に臨みたいと思っている。

縄文まつりは地域の人と共にまつりを創りあげる体験。古代の生活に思いをよせて自然の恵みに感謝し、更級の地をよりどころとした子が育つことを願っている。子どもたちには程よい責任感のもと、地域の方々とふれあいながら楽しく参加できたことが、快い思い出として生涯心に残ってほしいと思う。

（更級小教頭・青木幸雄）

薪ストーブは４度楽しめる

二十年ほど前、父親が脳梗塞で寝たきりになった。家全体を暖かくする必要があり、薪（まき）ストーブを入れた。築七十年以上の古い家では家全体を暖かくすることはできないが、ストーブのある玄関に隣接する部屋は十分に暖かい。

薪ストーブの暖かさは石油ストーブのそれと違って、やわらかい。遠赤外線が出ているからと聞いている。その遠赤外線はからだにも良いとのこと。そのせいか、めったに風邪をひかない。

最初に入れた薪ストーブはガラスの部分が小さかったので燃えている薪が見えなかったが、昨年入れた二台目はガラスの部分が大きいので、薪が燃えている青白い炎がよく見える。

薪を燃やすための空気の取り入れ口の調整で、炎の姿が変わる。たくさん取り入れると激しく燃える。搾ると、炎に透明感が出てゆらめく感じになる。炎が舞っているような感じだ。薪の色も次第に白くなってくる。視覚に訴える暖かさを感じる。見ていて飽きない。人類の祖先は夜、火を焚いて獣から身を守ったそうだ。だから、火を見ていると安らぎを覚える。

見ていて飽きない炎

気になる薪のことだが、このごろは、りんごの木を切ってくれという依頼が多い。そして千曲川のニセアカシアが良い材料になる。薪ストーブ仲間から声が掛かり、一緒にもらいに行く。チェーンソーを使う時はできるだけ二人以上にしている。

薪ストーブを楽しむ人たちの間では、薪ストーブは三度楽しめるという言葉がある。薪を切って、割って、そして燃やすことのことだが、私にはもう一つの楽しみがある。仲間と一緒に働いた後、一杯やりながら薪ストーブの火を眺め、ストーブ談義をするときだ。ぬくもりが増す。

薪ストーブは鋳物でできているので、良質の鉄を産出する北欧製のものがよいと言われている。とにかく単純な構造のものがよい。しかし、それで空気の複雑な動きを発生させている。

中にネジなどがあるものは高温でナマッテしまい修理が難しくなる。驚くことは煙突がストーブ全体と同じくらいの値段がかかること。それは二重の煙突で燃焼効率を良くし、煙をあまりたくさん出さないためだ。

幸いなことに、さらしなの里友の会メンバーの中にストーブ設置の専門家がいるので、もし薪ストーブに関心のある人があったら、いろいろ聞くことができる。私もメンテナンスなどいつも相談に乗ってもらっている。

（塚田正志）

おらほの冠着 17

古代人もひと休みした古峠

千年の昔、「延喜の官道」と言って、都から全国各地へとつながる道路が開かれた。信州には東山道が通っていた。

都から美濃（岐阜県）を通り、神坂峠を越えて伊那に入って北上。当時の信濃国の国府のあった松本へ出て、それから保福寺峠を越えて上田へ出て、碓氷峠を越えて関東に通じていた。

一方、松本から出て旧四賀村（現松本市）で分かれて越後国（新潟県）に通じる道もあった。これは東山道の本道から分岐して伸びる支道と言える道である。この道は麻績の駅家を経て冠着山塊を越え、善光寺平を通って日本海に達していた。

このときに使われたのが古峠。冠着山越えには一本松峠、猿ケ馬場峠とあるが、平安時代の峠道は古峠だった。この峠の最も美しい特色は眺めの良いことである。ここ（写真中央）に立てば、これから行こうとする道筋がすべて見えて、遠く遠方の山々も見渡せる。千年前の人々、旅人や使命を帯びた官人たちはここに腰を下ろし、汗をぬぐいながらこの開けた世界をつくづく眺めたものだった。

この峠、中世には一本松峠、さらに猿ケ番場峠越えの道が開かれて、多くの旅人はそちらを通るようになったのだが、実は連綿として地元の人々によって使われていた。

こちらから坂井村（現筑北村）の山へ薪取りや草刈りに行く道として最も近い道で、年中にぎやかに往来があった。馬が通れるほどの道幅はあり、今でも山腹にはくぼんだ姿の昔の道が残され、古峠近く、ワタクボ地籍の大岩には石の馬頭観音（写真右）が鎮座し、それには「羽尾村中」と刻まれている。

「村中」とは村人みんなで建てたという意味である。往時の通行のにぎわいを物語っている。（塚田哲男）

〈編集後記〉さらしなの里縄文まつり開催第十五回を記念する本「里と人にいやされるさらしなつりにかかわる多くの方々に執筆していただきたいと考え、原稿を依頼したのが昨年末。締め切りの今年二月末までに大半が集まりました。

これには励まされました。当会で記念出版事業を決めたのが昨年夏。二年ぐらいは必要ではとの意見もありましたが、やはり十五回の節目にと決めました。正直、本当に可能かどうか不安があっただけに、原稿が一気に集まったことに、縄文まつりと子どもたちに対するみなさんの思いを感じました。

本では、さらしなの里の縄文とはどういうものなのかについて、はじめて体系的にまとまった解説をしています。「小学生からお年寄りまで楽しく読めるように」という編集方針で臨んだのですが、どれだけ実現しているか。ご感想もお寄せいただければうれしく存じます。

友の会だより第十七号は「火」が一つのテーマとなる文章が並びました。佐良志奈神社の新嘗祭の豆がら焚き、火の使用が可能になったことから一気にアイデアが出た縄文まつり、薪ストーブの炎。

「おらほの冠着」は、五月に亡くなった郷土史研究家、塚田哲男さんの遺稿です。

編集・発行
さらしなの里友の会だより編集委員会
事務局・さらしなの里歴史資料館
〒三八九-〇八一二
長野県千曲市大字羽尾二四七の一
電話　〇二六（二七六）七五一一
Fax　〇二六（二六一）四一六一